

## 「Aさんが教えてくれたこと」

山本 ひろよ

大学に入るまでの私は「障がい者」と聞くと、「サポートが必要な人」と言うイメージを持っていた。「障がいがある人も無い人も、同じ人間」そんな考えは、心のどこかで理想論だと思っていたし、実感が持てない考えだった。

私は「支える側」で、障がいがある人は「支えられる側」。そんな私の考えを根本から変えてくれたのが、大学時代に知り合ったAさんだった。

Aさんは、私が通う大学の近くで一人暮らしをしていた。生まれた時から脳性小児まひによる障がいがあり、車いすに乗り、1日24時間介助を受けながら生活されていた。

Aさんと知り合ったのは、Aさんが大学の授業で介助のボランティアの募集をされ、それに私が立候補したことがきっかけだった。当時の私は福祉系の学科に所属し、将来に向けてのいい経験になればと思い、気軽な気持ちで立候補したのを覚えている。

ボランティアの内容は、日常生活に必要な介助全般。一緒に食事を作ったり、トイレの介助をしたり、車いすへの乗り降りの介助をしたり、24時間介助が必要なため、泊りのボランティアの時は入浴の介助をしたりと多岐に渡った。

気軽な気持ちで立候補した私は、すぐに自分がいかに役に立たないかを思い知った。介助の経験が無いことはもちろん、家事のスキルもろくに無い。特別なスキルはいらないと聞いていたが、本当に役に立たなかった。

そんな私が、おこがましくもボランティアとして活動できたのはなぜか。それはAさんが全て、やり方を教えてくれたからだ。料理の仕方も介助の仕方も、障がいがあるAさん自身が教えてくれた。

Aさんは脳性小児まひのため、自分の意志で動かせる体の部分が限られているし、身体の機能していない部分を機能している部分で補いながら生活されているため、身体への負担が大きい。同じように座って息をしているだけでも、私より身体に大きな負担がかかっている。そんな状態で、Aさんは、「ボランティア」の私に、丁寧に野菜の切り方から、おひたしの作り方、身体の支え方など、0から丁寧に教えてくれた。

ある日、Aさんが言った。

「あなたはボランティアとしてここに来てくれている。それはとてもありがたい。私はあなた達ボランティアがいないと生きていけない。でも、あなたにボランティアをしてもらうために、私はあなたに全部教えなくちゃいけない。あなたより私はよっぽど料理が上手だと思う。でも、周りから見たら、私は障がい者、あなたはボランティア。私は手伝ってもらう人、あなたは手伝う人。なんだか不公平だと思わない？」

そして、Aさんはこんな話もした。

「福祉の勉強をしているなら、私たちは、あなた達に、私たちと同じ場所に立って世界を見て考えてほしいと思っている。今のあなたはどこに立っている？」

ショックというよりはもっともだと思った。そして、ボランティアって何だろう、障がい

者・健常者って何だろうと思った。

Aさんは自分で思うように身体を動かさない。でも私より料理だって掃除だって得意だ。

恥ずかしながら、その会話を通して、ようやく「障がいがある人も無い人も、同じ人間」という言葉に実感が持てた。

私には得意なこと不得意なことがある。Aさんにも得意なこと不得意なことがある。一人ひとり、得意なこと不得意なことがある。ただそれだけのこと。そこに健常者とか障がい者とか、区別はいらない。

その後も私は、ボランティアを続けた。相変わらずいっぱい教えてもらったし、いっぱい怒られた。でも前よりも、「Aさん」という人と向き合っている気がした。「障がい者のAさん」ではなく一人の人であるAさんに。

私は今、福祉の仕事をしている。仕事で、小中学校で福祉の授業のお手伝いをするところがある。授業で子どもたちに伝えたいこと、それは私がAさんから教えてもらったこと。同じだということ。違うから支えあうのだということ。

この言葉を子どもたちに実感を持って伝えられる私にしてくれたAさんに、心から感謝している。